

福島県現代俳句協会会報

第4号 2020年・秋

編集 福島県現代俳句協会会報編集部 春日 石塚
福島市八木田神明十三の八 090(6220) 4757

令和二年度県現俳総会

書面決議で承認

事業活動方針など確認

令和二年度福島県現代俳句協会総会は、ご案内の通りコロナ禍により書面決議となり、全議案全員一致の賛成で承認されました。

当面は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、会員で親しく顔を合わせて交流・学習する機会は制限されますが、大きな二つの事業活動、①県会報を通じての会員交流②秋の吟行句会を成功させるために、会員の皆さんの絶大な協力をお願い致します。

また県の規約も改定しました。今までは「理事会」「役員会」という二重の組織でしたが、現状に合わせて簡素化し、「理事会」を廃止しました。本部に属さず県のみ所属する「県会員」の会費を二〇〇〇円に引き下げ、先ずは気楽に県現俳に参加していただけるようにしました。さらに旅費規定も明確ではありませんでしたが、これを「細則」で明確化しました。議案書をご覧ください。

今総会は役員改選の年ではありませんが、事務

局次長に阿部多み子の追加の承認を得ました。また地区代表は、県北Ⅱ久保羯鼓、県中Ⅱ石澤遙、県南Ⅱ加藤征子、会津Ⅱ田中雅秀、浜Ⅱ平子玲子が担当しています。(敬称略)

仲間づくりをさらに進めよう!

福島県現代俳句協会会長 春日 石塚

暑い日が続いております。令和二年度総会議案のご承認ありがとうございます。

総会を経て、会員の皆さんには令和二年度会費の納入をお願いしてきましたところですが、八月現在の会員数は39名となりました。昨年の総会后32名まで減少していた会員数も、皆様のご尽力で会員を増やすことが出来ました。40代・50代で新しく会員になられた方もおられ、期首の目標にしていた「若い世代へのアピール」が一定の成果を果たしたと言えます。

規約改正により五十歳未満の方の本部入会金は無料になりました。三十歳未満は本部年会費も無料ですので、皆さんのお知り合い、ことに若い人たちに現代俳句協会への入会を今後とも勧めていただければと思います。そして会員の皆さんが顔を合わせられる日を楽しみにしています。

新入会員紹介

高市 宏(郡山・「桔槔」)

食堂の黒猫太る春の星
水受けるかたちちに開く紫木蓮
青春をよぎりて黒し揚羽蝶

六四歳の会社員です。俳句のスタートは大学時代ですが、卒業後休眠して二十年前に再開。間もなく退職なので、再び俳句で「青春」したいと思っています。

(※編集部注…3句目は大学4年時、全大学生俳句大会推薦大賞受賞された句です)

鈴木亜由美(三春・「桔槔」)

春雷や古書を繙く昼下がり
手拭いの折り目眩しき早苗月
嗽して六月の風吸ひ込みぬ

このたびご縁をいただき、福島県現代俳句協会に入会させていただきました。心より感謝申し上げます。今後とも何卒よろしく
お願いいたします。

会員作品7句

追伸

服部きみ子 (福島)

春炬燵話せば長くなる話
ふつふつと脳の泡立つ盛夏かな
水打つて仏の道をつくりたり
追伸に本音を少し実南天
蒲の絮今日の風には乗る気配
最後には燃やすつもりの日記買ふ
日向ぼこ明日在る事を疑はず

偽名の火花

斎藤 秀雄 (鏡石)

木星近し雛遊びして指先残る
樹の灰の樹のおもかげを蛇滑る
木耳の木木に偽名のまま触るる
石が燃え尽きて檸檬の埋め尽くされ
ひらかるる指へ火花の小鳥たち
日記が沖に墜ちては紺の狐に逢ふ
くれなるをぶつけて鶴の鉄の夜

不安

平子 玲子

(いわき「山河」「ロマネコンテイ」)
嘘泣きのゐるかもしれないぬ涅繫絵図
ふうせんを持たされてゐる不安かな
菜の花を食べ青虫のごとく寝る
母の日の母で居させてもらひけり
青蛙鳴かねば乾く過疎の村
路地夕焼かくれんぼうの声がない
甘えたき時も長女や赤のまま

白昼夢

池田義弘 (福島「暖響」「街」)

春逝くや縄文遺跡の溜り水
菩提樹を仰ぎ輪蔵廻しけり
仏飯に親子雀の弾みくる
除染土の山を越えゆく穂絮かな
楸邸の蟬蛸が飛ぶ白昼夢
ウイルス蔓延赤べこは首振つてをり
下校児の道草をして蝌蚪の国

県会員作品一句鑑賞

生きてまた逢へし老樹の桜花 久保鞆鼓

この春滝桜の周辺は異様だった。満開と満月が重なる事は稀と聞き日時を確かめ出掛けた。全てが人を拒絶していて満開の桜が痛々しく見えた。桜の真上に月の昇る位置を確かめ待つこと30分雲間から満月が見え出した。遮る雲を押し分けだ明るい空に朧月が昇った。「滝」は満開の姿で月を樹上に掲げた。この感激を知る観客は我等4人のみ、その2日後観覧禁止となった。掲句にその情景が甦った。「満開もて満月迎う滝桜 遙」

(石澤 遥)

洋間しかない建売住宅夏の果 田中雅秀

俳句とは何なのかも知らず句会に参加し始めました。漢字もろくに読めず、意味もあやふやであるが、時々深く考えさせられる句がある。

掲句は、私でも思い浮かぶ光景です。昨今の核家族化。社会的要因もあるが、それが人の尊厳を学ぶ機会を失うことかもしれない。

二世代、三世代での親族関係は、社会の出るための教育の環境として必要かもしれない。そんなことをちよつと考えました。

(高野カズオ)

私を変えた一句

光りては虫鬼灯の中の色 イツ子

唯木イツ子 (福島)

カルチャー教室に入って間もない頃詠んだ私の句ですが、その時の講師だった佐藤昌市先生に、この句は下五の助詞の使い方がいいと褒められ、嬉しい気持ちでいた自分を思い出します。この句が自分を変えた句ではないのですが、カルチャー教室に入って間もない時に詠んだ句だったので、私の中に残っている一句になっているのです。

それからは先生に褒めてもらえる句をもっと作りたいと子供みたいに思いながら、しばらくして私は侘助の花が好きで、侘助の句をどのように読めばいい句になるかと先生に尋ねたら、先生は少し間をおいて、しかも笑いながら、侘助をうまく詠むのは無理だと云われ、ズーとそのことが理解できないまま月日が過ぎ、侘助の句に出会うたび昌市先生の云われたことを思い出してました。

それでも少し分りかけてきた頃、何でもいいから思い切つて作ればいいと言われ、時々暴走した句を作り、今日の句は…と思いつきながら句会に臨むのですが、そういう句に限ってあっさり消されてしまう羽目になり、おかしくなつてしまします。

娘と同居おぼろじめりの灰ならす

栗林 千津

加藤征子 (須賀川)

俳句にかかわり、初めて頂戴した句集『命独楽』の千津さんの一句。熱くならず、距離感がほど良く見事に表現された一句一句に近付きたいと俳句を続けてきました。

文字摺草夕日に返す母似の手

草や木の魂飛ぶ冬田日和です

母在らぬ西日の生家がらんど

及びもつかぬ事ですが、句を作る目標となりました。

東京から仙台に主人の転勤、その御縁でまったく予想もしなかった俳句に拘わることとなり、千津さんの「詩心を大切に素直が一番」と暖かい指導のもと、遅々とした歩みを始めました。

私の母が手慰みに作った棕櫚の蠅叩きを差し上げた時に、お母さんへ…といただいた句が、

長生きの家系や棕櫚の蠅叩

百一歳になった母は今もつて心の支えとし口遊んでおります。

心に残る句を一句でも心がけています。

葱提げて遙かな齢にさしかかる 千津

年を経て、自分の齢をおもんみるに、まだまだ

…の思いでおります。

私の好きな季語

「踊り」 丹羽裕子

好き季語は、ひよんなことかから生まれた。俳句を始めて三年目ごろ、俳誌「現代俳句」に森下草城子が、私の駄句を載せてくださった。当時は氏の存在も知らず、赤面の至りであり、大きな驚きでもあった。

山峡の月も踊りもみな白く

裕子

それから氏の存在も知り、氏の俳句の純朴さ、飾らない人柄の暖かさに接し、人知れず一ファンとして愛唱して過ごして来た。

ところが、この文を執るにあたり、草城子の句を調べたところ、「現代俳句協会賞」受賞の作品の一句目に氏の秀句を見つけた。二度目の奇跡である。

山家盆唄踊らぬ奴も白むかな 草城子

私の思い上がりも甚だしいが、「踊」の原風景を共有していたという思いで胸が熱くなった。

私は田島町(現南会津町)の近郊の村で育ち、忘れられぬ故郷の原風景の一つになっているのが盆踊である。大きな月の下に境内の踊は月が包み込むように、白く浮き出していた。十数人の踊の輪、囃子方は唄に合わせ、踊手は俯きかけんにしなやかで、合の手だけがサラリと響いていた。

句作に迷い蹴く今、この季語に出会ったことを大切にしたい。

『福島吟行案内』 俳人協会刊

公益社団法人「俳人協会」が『福島吟行案内』

を刊行した。同協会が発行する「吟行案内シリーズ」の三十五冊目とのことで、「あとがき」によると平成二十七年から本格的に県俳人協会で準備に入り、五年の歳月をかけて完成させた労作である。また各章に掲載されている例句については、全国の会員に募集を募ったというスケールの大きさ。

福島県の各市町村漏れなく取り上げ、各地区の見どころや歴史をコンパクトに且つ丁寧に説明してくれている。最寄りの駅やバス停・所要時間、問い合わせ先の記載など、吟行の手引きとしてまさに至れり尽くせりである。

評者の住む福島(市)を見ると、芭蕉ゆかりの文知摺観音・医王寺、人気の花見山などは勿論のこと、旧堀切邸・土湯峠温泉郷・小島の森など地元の人ならではのチョイスによる吟行地が選ばれており、通り一遍でなく満足度が高い。

被災地・福島の特徴として「東日本大震災とその後」が二章にわたり説明されており、これは全国の俳人に発信する意味でも貴重。関連句の記載があればなお臨場感が増したと思われるが、現在の福島を知ってもらいたいという編集者の熱意が伝わってくる、意義深い好企画と感じた。

県俳人協会の総力でこのような素晴らしい本が出版されたことに深く敬意を表したい。(戸塚)

前号会報より

この句がよかった!

五十嵐 進

カコケセカコケセ枯葉を蹴ってゆく

佐藤弘子

カタカナ語が巧みだ。「過去消せ」なのだろうがK音とS音が擦過音として耳に残る。乾いた命の枯葉の音でもある。せつなさが音として響く。

今朝の霜無音無色彩の未来

春日石疼

霜が降りて一望冬ざれの景の無音。色の消えた世界が広がっている。そこに時間軸が加わる。今をとらえた詩人の目だ。

百合の首切つて横顔もち帰る

国分衣麻

「横顔もち帰る」に俳の妙がある。対象に一步踏み込んだ時に発揮される把握の意外性こそ作句の醍醐味であろう。

さくさくと雪のほひの露の祖父 長岡 由

春先いつも露を持ってきてくれたのだろう。祖父の体全体に冷気が残る。その冷気が「雪のにおい」なのだろう。「さくさく」とは。

暗転ののち一面の雪野かな

田中雅秀

「一面の雪野」は象徴であろう。前景とは転じた今、寒々しくはあるが一切のものを雪が抱え込んで

くれて一転の心機にて立つ私。

生死とは吾にはあらぬと瀧桜

久保鞆鼓

推定樹齢千年の瀧桜。その瀧桜との対話。千年には生死を超えた神々しきがある。「吾にはあらぬ」ということばを聞き出した。

福島県現代俳句協会主催

吟行句会開催します!

10月11日(日曜)

10時~16時

開成山大神宮・開成山公園

安積開拓開成社資料館

などを吟行予定

事前の申し込みが必要です

(詳細は添付文書ご覧ください)

編集後記

新聞もテレビも「新型コロナウイルス」の毎日。将来の「収束」後も「新しい生活様式」が求められるといわれますが、これまで人間が作り上げてきた文化はそう簡単に覆されるものではないでしょう。ウイルスと折り合いをつけながら、新しい生活を探っていききたいものです。これからも県現俳協は会員の繁りを大切に進んでいきます。まずは吟行句会への参加をお待ちしています。(S)

春日石疼会長が句集『天球儀』にて第42回福島民報出版文化賞(奨励賞)を受賞しました。